

北九州市立大学

文学部紀要

第86号

西南戦争揃物錦絵集成稿

—「有のそのまま」(大阪・金井徳兵衛編輯兼出版、明治十年三月刊行)—

生 住 昌 大 …………… 1

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2016

西南戦争揃物錦絵集成稿

―「有のそのまま」(大阪・金井徳兵衛編輯兼出版、明治十年三月刊行)―

生住昌大

はじめに

明治十(一八七七)年に起こった西南戦争を、時事報道的に描いた錦絵群は、一般に「西南戦争錦絵」と呼ばれている。幕末から活躍してきた浮世絵師が筆を執り、戯作者もその制作に携わったこの「西南戦争錦絵」は、事件の盛り上がりに乗じて出版されたその際物的な性格から、従来あまり顧みられることはなかった。しかし、これが今、美術史のみならず文学史の空白域ともなっている。この空白域を埋めることにより、これもまた不明瞭な部分を多く残す、明治十年頃の出版界の様相が描けるようになると思われるのだが、研究の俎上に載せようとしても、その数はあまりに多く、手をこまねいてきた。

ただし、「西南戦争錦絵」を特集した画集は、既に備わる。中でも、小西四郎編『錦絵幕末明治の歴史8 西南戦争』(講談社、昭和五十二年)や塩谷七重郎編『西南戦争と福島県人』(歴史春秋社、平成三年)などが最もよく整理されているが、これら既存の画集

は、大判三枚続物をその中心に据えており、大判にせよ中判にせよ、一枚物は付け足し程度の紹介に留まっている印象である。それは、一枚物が大判三枚続物に比べ、どうしても見劣りがするからであろう。その画面が小さいの言うまでもなく、粗描な画も多いのが一枚物である。その代わり、戦況等を伝える文字情報を充実させているのだが、やはり画集という性質上、一枚物はその隅に追いやられる結果となっている。

だが、当時の人々は、「西南戦争錦絵」を鑑賞用の美術品としてではなく、第一義的には、戦況を伝えてくれるメディアとして享受していたことが、既に知られている。ならば、画の出来映えや迫力という点においてはやや見劣りがする一枚物であったとしても、文字情報を充実させて西南戦争報道の一翼を確かに担っていたと考えるならば、三枚続物と同様に重要な資料群であるはずなのである。

この一枚物が、実に様々な姿を見せている。大判三枚続物は、大画面に戦闘場面や陣中の様子を描き、その画の説明文を載せ

たものが一般的だが、一枚物は、瓦版風の体裁に文字情報を充実させて戦況を報知した錦絵新聞、「官」「賊」双方の主立った者たちを取り上げてその略歴を記した肖像画、さらには風刺画などもあり、その内容は未だ知られていない。

この多種多様な一枚物を概観するには、刊行順に一つ一つ拾い上げていくのではなく、一つの外題（題名）の下に連作された揃物ごとに、集めていくことが適当だと考えた。そこで、それらを「西南戦争揃物錦絵」と仮称し、これまで収集・整理してきたその成果を、今後継続的に報告していきたい。

しかし、「西南戦争揃物錦絵」と仮に称するものの、「揃物」として完全なかたちで現存しているものは皆無と言ってよい。現代においても、何か一つのシリーズ物を完全にコレクションできる人は稀である。また、理由は定かではないが、途中で刊行を打ち切ったと思われるものがほとんどなのである。それでも、調査・収集で得られた資料を基に、ある程度まとまった数の揃物から、おおよその刊行順に、少しずつ紹介してゆこうと思いついた次第である。

「有のそのまま」について

「有のそのまま」は、大阪で刊行された錦絵新聞の一つで、初号は西南戦争の開戦からおよそ一か月後の、明治十年三月の刊行である。大阪出来の錦絵新聞をまとめた、土屋礼子『大阪

の錦絵新聞』（三元社、平成七年）は、第一部第五章で十三番目に「有のそのまま」を取り上げて、以下のような解説を行っている。

⑬ 『有のそのまま』…大判で囲み枠がなく瓦版的な体裁が特徴。西南戦争の報道のみを扱ったシリーズ。明治十年三月に発行され、全部で二十号ある。編集出版人は金井徳兵衛（⑪『錦画百事新聞』の編集者と同じ人物だが、未詳）。絵師については記名がない。

土屋氏が調査された早稲田大学図書館西垣文庫の他に、西大寺文化資料館（岡山県西大寺市）もまた、この「有のそのまま」を初号から二十号まで揃えているが、同氏のこの先駆的な著書の刊行から既に二十年余りが経った現在、新資料も見つかり、若干の補筆が可能となった。

本来は一枚物であるものを帖仕立てにした北九州市立大学所蔵「有のそのまま」は、初号から二十三号までを揃えており、新たに二十一号、二十二号、二十三号の所在を確認することができた。ただし、二十号までは「鹿児島県 有のそのまま」であった外題が、二十一号以降「夏陣 有のそのまま」に変わってはいる。それでも、編輯出版人は同じく金井徳兵衛であること、届日もまたそれまでと同じく「明治十年三月五日御届」と刻まれていること、さらには二十号より以前の「夏陣 有のそのまま」も確認できないことから、これらは同一の揃物と

見なせよう。

また、二十一号のみにではあるが、画面右下に「貞信画」と彫られた落款を確認でき、画工として浮世絵師の二代長谷川貞信以下貞信が、その制作に関わっていたことも判明した。無説論、外題に若干の変更があったこの二十一号から、貞信が画工を務めるようになった、とも考えられようが、その筆は初号から二十三号まで、変わってはいないようにも見える。

この編輯出版人の金井徳兵衛と、浮世絵師二代長谷川貞信の関係についても、前掲の『大阪の錦絵新聞』に詳しい。同書は、「大阪では最も多く号を重ねた錦絵新聞で、一九〇号(明治九年九月二五日付)まで出版され」という「錦画百事新聞」について、同紙初号より貞信が画工を務め、同紙二十号からは金井徳兵衛が編輯人となり、最終号までこの二人がその刊行に携わっていた事実を教えてくれる。そしてその後、西南戦争勃発の報に接した両名は、西南戦争報道に特化した錦絵新聞「有のそのまま」の刊行へ乗り出した、ということになるのだろう。

「有のそのまま」本文には、「西南暴動の始りより、をいはい各処の戦撃を有の其俣しらせます」(十二号)とあるが、西南戦争を伝えた実録風読み物や錦絵と同様、画も本文も新聞記事を種にして記されている。新聞記事と、実録風読み物や錦絵との関連については、拙稿「西南戦争と錦絵—報道言説の展開と明治一〇年代の出版界—」(『日本近代文学』第90号、平成二十六年五月)で詳述しているが、例えば、「有のそのまま」一号は、明治十

年三月二日付『東京日日新聞』や同日付『大阪日報』などの紙面で掲載された「行在所達第五号」(明治十年二月二十五日、太政大臣三条実美)を基にして制作されている。また、新聞記事と同様に、当時巷に流れていた風聞をも取り上げ、騎乗の戦士が周囲の敵を蹴散らし、(四十二号)、長刀を手にした「女隊」が戦い(七十五号)、両軍の将が騎馬で刃を交える(七十二号)ような、実際とはかけ離れた画もまた描いている。無論、そうした荒唐無稽なものばかりではなく、十四号ならびに十七号では、熊本城を中心として、「熊本国界、里程并に官軍諸将方の陣營、焼土の場所、戦争の街、賊軍の屯集処など」(十四号)を示した絵図も描かれている。

なお、「鹿児島 有のそのまま」としては最終号にあたる二十号は、四月二十四日及び同月二十六日付『大阪日報』記事をその典拠としており、「同五月出版」となっている。一方、「夏陣 有のそのまま」と外題が変わった二十一号は、出版日が空欄となっているものの、調べてみればそれは、明治十年七月四日付『大阪日報』記事などがその典拠となっており、二十号と二十一号の間には、二か月ほどの休刊期間が判明する。新聞紙上では、相も変わらず戦争報道が盛んであったにもかかわらず、「有のそのまま」が刊行を一時中断したその理由は、一体何故であろうか。

この点についても、土屋氏の『大阪の錦絵新聞』(前掲)に、興味深い指摘がある。

不思議なことに、これらの錦絵新聞は、明治八年三月から五月にかけて集中的に出された後、忽然と消滅している。戦闘自体は九月末に西郷らが自刃して終結するまで続き、その間も戦争報道に対する需要はあったはずで、商売としてうまくゆかなくなったとは想定しがたい。おそらく政府関係機関からの干渉があったのではないかと思われるが、これは推測の域にとどまる。

大阪で刊行された錦絵新聞に限って言えば、錦絵新聞「まことの電知」(大阪、鈴木利兵衛版)は、確かに「四月出版」と記されており、以降は刊行が途絶えたようである。そして、「有のそののまま」もまた、五月に入って刊行を途切れさせていた。だが、西南戦争報道に特化した錦絵新聞が皆無となったわけではなく、六月に刊行が始まったとみえる錦絵新聞「征討電聞」(大阪、沢田由松版)などもある。そして、新資料「夏陣 有のそのまま」二十一号、二十二号、二十三号の発見により、七月以降「有のそのまま」が復刊したこともわかった。土屋氏の推測のように、政府関係機関からの干渉があったとするならば、その干渉はわずか一、二か月ほどで機能しなくなったのかもしれない。

ちなみに、西南戦争期における貞信と金井徳兵衛との共作は、「有のそのまま」だけに留まらず、実録風の読み物『鹿児島電信』にも及んでいる。これまでは国立国会図書館が所蔵する同書六号までしか確認ができなかったが、北九州市立大学で七号を購

入することができ、少なくとも七号まで刊行されていたことがわかった。ただし、七号でも未完である。八号以降も刊行されたのかどうかはわからない。参考までに、以下に『鹿児島電信』の書誌をまとめる。

鹿児島電信。木版。中本。七号七冊存。四つ目綴じ。摺付表紙。各号本文十丁。一冊四銭五厘。「明治十年四月十七日御届／同四月出版」(初七号)。編集出版人金井徳兵衛(阪府第三天区六小区新町南通二丁目十一番地)。摺付表紙には二代長谷川貞信の落款を確認でき、各号異なる彩色木版の見返し画と、各号五図の挿絵を備える。西南戦争に取材した読本体裁の実録的読み物。七号は、三月下旬の植木・木留方面の戦いから、七月下旬の都城陥落までを描く。

最後に、西南戦争期の貞信は驚くほどの作画依頼を引き受けており、決して金井徳兵衛とのみ仕事をしていただけではないことを付言しておく。例えば、挿物錦絵では、『鹿児島県』人名録(大阪、前田喜次郎版)、『方今有名録』(大阪、前田喜次郎版)、『鹿児島県』英勇伝(大阪、田中安治郎版)、『明治十年』鹿児島西郷記(大阪、矢氏版)などがあり、大阪の絵草紙屋からの注文を広く受け付けていた。また、前掲『鹿児島電信』と同様の実録的読み物としては、大阪の八尾徳蔵が編集出版人を務めた『薩徒一乱聞事録』にも挿絵を描いており、さらに、金井徳兵衛とは手が



鹿兒島 有のそのま 初報

そもそも今般鹿兒島県下暴挙の発りは、本年一月三十一日夜を初め、県下の弾薬庫へ、逆徒多人数不意に押入り、小銃、弾薬あまた奪取、二月二日、三日の夜には、又も同処へ乱れ入り、堅護の官吏を騒がし、倉庫に残れる物品をことごとく掠め取り、標札を掲げ改め、不日郵便太平丸が鹿兒島港へ帰航、碇泊を見懸け、乗組の官員を引とどめ、兵器をふるふて各所を徘徊するは、容易ならぬ形状のため、高雄丸にて、河村海軍大輔、林内務少輔の両公を現状取組として、鹿兒島へむかはれしに、県官への使ひ、属官二員を拘留し、鉄炮をそなへに船を操出して、該船に迫り、筒先を開くべきふるまひに、該舟は纜を解き、近傍の海岸へ碇を投し、大山原令へ事情を糺すに、逆徒は倉庫弾薬を暴挙してより、急を駆り、当時帰島の警察官吏あまたを縛り、忘説を鏝り、人心を動かし、兇徒を聚る形跡を見認め、両公帰京、上奏となりたる折柄、去る十八日には、西郷隆盛、桐野利秋、篠原国幹等、政府へ尋問を名とし、凶徒を引率し、兵器を携へ、熊本県下に乱暴し、国を蔑り、治世を妨げる挙動より、すでに征討の御趣意に陥りたるこそ顕然たり。

附て曰 各所の開戦は、続いて凶画を報す。

明治十年三月五日御届／同三月出版
 編輯出版人 阪府第三天区六小区新町南通二丁目十一番地 金井徳兵衛
 右から、「逆徒」「官軍」。

※「事情」の傍訓「ことづら」を訂す。



鹿兒島 有のそのまま 一頁

備、西南暴徒の勢揃の場所は、鹿兒島城正門の外、大下場跡に、凡二十歩四面に柵を結び、広々たる原野に雪降、風はげしく、肌へを削る午前六時、私学校の壮年輩等、着流しの股引懸け、みなみな刀を横たへ、前後の列の摺雑より、同士討ちの血を争ひ、凡其勢八千人、やがて隊伍を備へ、鉄炮、火繩を粧ふて、西郷の勢、篠原勢は先立て、鹿子嶋原を跡に見て、肥後水俣にて会陣す。○二月廿四日夜、三好、野津の両将、近衛鎮台一大隊づつ率ひて、南の関に陣す。○廿五日、兵を分つて、高瀬、山鹿の戦争。○廿六日、山鹿より進撃、前田、達磨返し坂の戦ひ。暴徒、閑道より出発して、官軍大苦戦。○廿七日、激戦。暴徒散々追討れ、破れたり。該日、官軍大勝利の電報達し。○廿八日、暴徒、此日の敗北を雪んと、南の関より戦場を開きたれども、利なくして破れ、また、暴徒軍中には、作銘の旗を押立しは、下等輩が手から出るものといふ。○三月一日には休戦なり。○跡は次号に追々報す。

明治十年三月六日御届/同三月出版
 編輯出版人 阪府第三天区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「西郷隆盛」「桐野利秋」「篠原国幹」「官軍」。

※下等(ばつか) 〓手下という意の「幕下(ばくか)」の音変化。



鹿兒島縣 有のそのまま 三号

熊本城外地雷火

サアサア、鹿兒嶋の暴挙は、追々よい噂を聞きます。二月二十二日、二十三日兩日の戦争は、官軍、破竹の勢ひにて、賊勢を味方ちかく充ぶんに引入れ引入れ、其斯こそ得たりといふや否、俄に地雷火発したれば、賊勢はあまた空へ打揚げられ、地に斃れ、死傷すくなからず。此急策に、賊は城に近づくことあたはず。官軍、勝利数度。籠城の手当も充分にて、廿七日の戦場には、賊將村田新八は深傷を負ひ、双方しばしば休戦。不日、官軍大挙にして進まん景況。また、賊方には民間の焰硝を捜すに、最はや其人足賃を払ふ事を得ざるほど、兵氣おとろへる体裁なれば、此たよりをきき、皆さんかならず世間の浮説を信とせず、安心なされと、吉報を示す。後はをいをい、次号に。

明治十年三月五日御届／同三月出版

編輯出版人 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

「賊村田新八」。



鹿あり
 有のそのまま 四号

はら切坂、官軍大勝利

つづいて、御安心のため、鹿兒島一件をおしらせ申すは、三月三日午前六時より、熊本県下の山鹿、高瀬、二夕所の大戦は、昼が夜るやら、夜るがひるやら、わかちなく、高瀬口より打出だされたる官軍は、木の葉口の賊をちりぢりに破り、屯所を焼き、台場をうばひ、明る四日と攻わたり、腹切坂と呼び名せる田原坂へと採だし採だし、砲台三ヶ所をせめとり、木の根、岩かど、篠藪垣、難所をふみこへ、別軍をついで吉次坂まで進んだり(熊本より三里)。官軍、勇気はじめに増して、植木口の一方も乗とる猛勢。山鹿は、はやく炮たいを築き、海岸河内口の進撃まで、官軍たびたび勝利あり。そもそも、動拳の初めより、野津、三好の両将は、敵の陣前に立向かはれ、所々の急戦、大かたならず。千変万化の軍配は、いさましきことどもにて、已に賊将村田を銃傷に悩ませ、しばしば難戦。ひるまざるは、一騎当千の壮勇とも謂つべし。をいを吉報を次号に御しらせいたしますから、御あんしん(の)こと。

明治十年三月五日御届/同三月出版

編輯出版人 阪府第三天区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

「大阪鎮台長 陸軍少将三好君」。

※はら切坂「明治十年三月十四日付『仮名読新聞』記事には、「熊本の田原坂の地形は余り高くも有ねど或ひは上り或ひは下る九折にて守るに利にして攻むるに不便なれば旧熊本藩の士族味は此坂を名づけて腹切坂と云其意は敵方の士卒熊本の中に入らんとして此所を越られなば方にて此所を守る將兵の落度なれば速に履腹して其罪を謝するの例なりと故に此名あり」とある。



鹿児島県 有のそのまま 五号

備、西南戦地、官軍より焼はらひたる平街の煙いまだ尽きざるに、夜もほのぼの明けなんころ、霧にまぎれ、賊兵は熊本城の壕ばたまでひたと押よせたるに、官軍ははじめて賊軍が野山にみちみちたるを知り、かねて伏せもふけたる地雷火の地面を賊ふまず。西郷の宿陣前には、小高き土手を築き、青竹をやらひ、檜木の板に自銘の建札なせるよし。其本営は川尻にありて、熊本城を去ること一里。西郷は陣中にて温泉に浸し、囲碁に日を暮し、俳人茶坊をよせて悠々閑寛たるありさまなり、と風説もありませんが、どふであるう。跡はをみを、次号に報せませす。

明治十年三月五日御届／同三月出版

編輯出版人 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「西郷ノ臣」「西郷隆盛」。



鹿兒島 有のそのまま 六号

つづいて、西南暴動、熊本県下の統戦のはなしは、官軍は田原坂の囲みを三ヶ所まで乗取り、残る一堡を目がけ、陸軍士官何某と名乗て撃つ入り、縦横無尽に勇を震へど、いかな当るにかたく、続く手勢と七人とも枕をならべ討死せしは、目覚しかりし次第なり〔名、不詳〕。また、熊本の内城は堅固いふまでもなけれど、外廓竹の丸石垣より、賊兵をし入りたるにや。一と夜、城内の戦争物音、諠しくありしが、其薩兵、幾銃か帰り来らず。塵になりしやらんと、云いあへり。爰に薩兵より一騎当千と勇を振つて、前原一格と名乗つて突出たるは、「遠きものは音にも聞け。予は前原一誠の弟なるが、さきに天網を逃れ、今一隊をそなへ、花々しく兄の甲ひ軍せん」と其銘を旗にしるし、十一分に駆け廻り、薄手を屈せぬ若武者を、「あれ討取れ」と、官軍は口々に呼わり、専ら撃合ふありさまなりとぞ。跡はをいをい、次号に。

明治十年三月五日御届／同三月出版
 編輯出版人 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「西郷隆盛」「篠原国幹」「前原一格」「官軍」。

※竹の丸 明治十年三月十五日付『大阪日報』記事には、「此竹の丸は石垣の丈漸く一丈二三尺に過ぎず最も登るに便となる所にして慶長の昔清正公の該城を築くや竹の丸は敵を入らしむ地となさん而して塵にすべし」とある。

※「天網」の傍訓「てんかう」を訂す。



鹿兒嶋縣 有の七号

扱も、西南戦争については、親を見すて妻子を跡にして、勇々しく進発をなすといふも、忠勇義心一閃に起るが中にも、熊本県下士官何某は、官軍の隊に加はり、目覚しき討死を遂げたるが、其妻女はかくと聞より、「はれも年月国恩を頂き、むなしく自滅せんよりは、いでや夫の無念を雪ん」と、女ながらもかひがひしく姿をよそおひ、長刀、小わきにかひ込んで、「おのれ賊兵、のがすまじ。いざ、出陣」といふ折しも、ここに年比召遣はるる娼は、袖にすがり、「まづ待給へ。わなみも主人の忠死を見捨るによしなし。死出の御供仕らん」と、見返りもせぬ妻女に付そひ、戦場さして出ゆく。向ふに、人やあるは、まさしく賊党の連類なれば、手早く剣をふり廻し、切込み、突入り、首をはね、「よい血祭り」と笑みをふくみ、戦地ふかくこみ入りこみ入り、方今稀成る貞操烈女、今巴ともいふべきか。をしむらくは、其薫名をたしかにきかず。おいおい確報もありませうから、次号にくわしくをしらせ申す。

明治十年三月五日御届同三月出版／定価一錢二リン

編輯出版人 阪府第三天区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

※巴＝巴御前。平安時代末期の女性。『平家物語』等で、一騎当千の女武者として描かれた。



鹿兒島県 有のそのまま 八号

統て、西南大戦に官軍巡查、田原坂なる賊の囲をはじめ、所々をこぼち、賊方には必死数多ありしが、其傍小平山へ忽然と賊勢あらはれたるより、官軍方には刀をひらめかし、敵の前後をささんで、終にここを迫退せけ、つづいて賊方は、熊本城にむかひ、薩地より取寄せたる臼砲を試みんと打かけしに、弾勢をよばず、城中より撃いだす大砲に、賊大いに損じたり。賊軍の勇氣しだいにひるみ、死傷も多きより、今は西郷も八百人の兵を率ひて、本陣を祇園山にうつし、いよいよ戦ひいづる見込なりといふ。篠原は吉次坂の戦いに死せしときく。村田新八は深手を負ひ、弟三之介は戦没せり。吉次、田原越にては、賊兵、刀を抜き、突入れども、利なくして、鍋田村を焼き、海軍のために、白浜河内口の賊勢は、砲にて撃れたり。西郷隆盛の末弟小平は討死し、ここに官軍に名をえし吉松少佐君は、勇を敵中にふるひ、半丁ばかり賊勢を退げ、をしむらくは、花々敷討死せられ、田原、吉次の戦に、大砲小銃を官軍分捕あり。跡はをい、次号に。

明治十年三月五日御届／同三月出版／定価一錢二リン
 編輯出版人 阪府第三天区六小区新町南通二丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「桐野利秋」「村田新八」「西郷隆盛」「篠原国幹」「吉松少佐君」「三好少将君」「西郷小平」「野津少将君」。

※三之介＝正しくは、村田三介。高城七次の弟。第十七聯隊旗を奪ふも、三月十一日に鍋田にて戦死。



鹿兒島 縣 九 歸

前号につづく西南の戦撃は、田原坂、植木口の賊を生捕り、大砲小銃を官軍へ分捕ありて、海路より賊勢の背を攻めたるに、賊は散乱し、また八代の土族は、官軍のため勇をふるひ、馳まはる勢ひに、賊兵は限府へ引揚げるよし。熊本への道は段々開らけ、をいをい田原坂本道、閉道より進撃官軍の勝利、数多塁を抜き取り、平山口の奮戦には、賊の正面より攻立しに、賊隊みだれ、鋒先退き、敗走の色を見せたり。すでに先号にも記載せし西郷は、川尻の本陣を北岡郷にうつしたる折しも、右翼と頼みたる篠原を初め、西郷小平は戦死を告げたり。別府新助は深手を負ひたり。賊兵は必死を極め、火薬筒を背負ひ、隙をねらひ、是に火を放せば、自分は微塵に碎け、其一人のため、相手は十七、八名もたをるといふ策は、風説すれども、全く空論なるべし。跡はをいをい、次号に。

明治十年三月五日御届／同四月出版
編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「西郷隆盛」「西郷小平」「篠原国幹」「別府新助」。
画面左に「官軍の発砲／賊勢をなやます」とある。

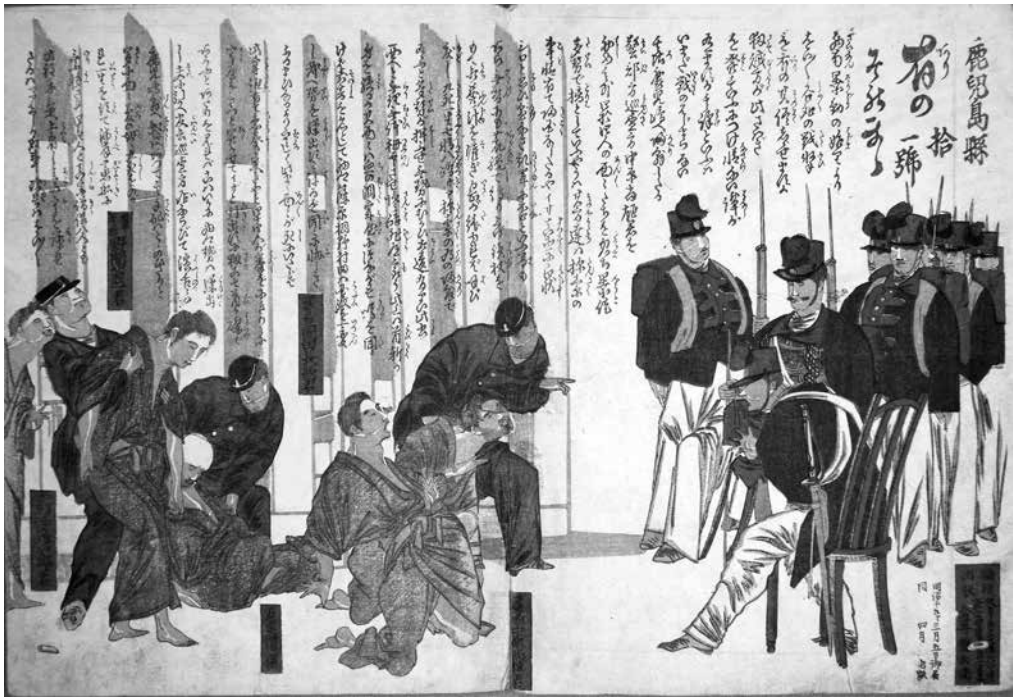


鹿兒島縣 有のそのまま 十号

統^{ひと}いて、西南の大戦争は、日々其鎮静を祈るといへども、いまだ防戦の煙横^{けいごう}ぎり、兇雲裂けやらす。一人西郷隆盛、血路を開かんと欲すれども、志^{こころ}遂る能はず。去程に、方今賊勢の一方ひらき、春色稍うつるひ、満開の花にひとしく、美び堂々と五百有余人、声^{こゑ}を揃へて操込む一隊あり。其粧装は、白木綿の鉢巻後に垂れ、緋の玉襷まばゆく、丈け髪を振乱し、甲斐甲斐しく長刀を横たへたるは、正しく一群の女隊なるが、何れの唄やら、箱入りやら、お三どんやら、等級いづれもさだかならず。畢竟同権の流言があればとて、浮雲い開戦をやられ升す。官軍方の勝利にをいては、度を算ふるに指を忘る。賊方には、軍略心胆を砕くが中に、西郷は忽然と彼方に出、此方に指揮し、前にあり、後に現れ、四、五名影武者ありといふは、信を得がたき風説ならんが、賊隊个程策を勞ずといふも、有名^{なま}の賊将、次第に戦没し、やや進撃も衰へたるか。莊嚴たる霜柱、旦の陽に滅すにひとしく、楚勢の強勇なるも、晩秋の落葉につれ、古郷の空に想を焦す敗卒の深情もかくやらん、と遠く量るのみ。跡^{あと}はをい、次号に確報す。

明治十年三月五日御届/同四月出版
 編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

※お三どんII台所で働く下女の通称。



鹿兒島県 有のそのま 十一号

西南暴動の始りより、をいをい各処の戦撃を有の其俵しらせますが、扱、賊方が此のさはぎを発す。いふにつけ情ない譚が有ますが、其訳といふは、いまだ戦のはじまらない其頃、鹿兒島へ帰県したる警部方、巡查方、中原尚雄君を初め、其外四拾四人の面々たちを、忽ち暴徒多勢で擒としていふやうは、「其方達は、探索の事情有て帰国なしたるや。イザ、真直に白状シロ」と思ひ懸なき糾問に、否といふ間もあら(ず)、無暫にも荒縄で縛り上げ、鉄杖をもて打、糞汁を濯ぎ、息が絶ゆれば呼び戻し、九死一生、七転八倒。「サア探索の為の帰県で有ふ」と多勢が押ふせ、無勢にむかひ、「相違有まい。此書、西へ」と無理無体押印させ、惨酷非道。最う此上は首斬か身を絞るか、其面々は血の泪、牢屋につなされ、噂を聞けば、都へ勢を操出すと謀るを聞くに、悔きふるは、国政を一変し、都へ勢を操出すと謀るを聞くに、悔きふるまひなるより、「空しく此まま面々が死にいたらば、此事誰有て急奏すべきや」と四十四人が拳をにぎりしに、牢屋をさつと開かせて、イザと引出すに、「扱こそ首か磔であるふ」とあたりを見れば、こはいかに、西郷勢は操出し、夫に引かへ官兵、巡查方、居ならびて、演舌には「鹿兒島県へ勅使あつて、其手配はととのひたり」と聞くに、面々夢の如く九死のがれ、一生を得て、海岸蒸船に乗移され、四十四人と真宗僧侶八人も、此程東京へ上着し、青い空を詠(め)られたるは、マア、けしからぬ事。次号はをい。

明治十年三月五日御届/同四月出版

編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「少警部中原尚雄君」「中警部園田長照君」「真宗僧侶」「藤野間兼一君」「西彦四郎君」。



鹿兒島編 有のそのまま 十二号

西南吉次越への官軍は、木留町に戦ひ、賊が守る処の砲台あまたを乗取り、是より続いて、攻戦昼夜引切らず。官軍には熊本へ達せんとの見込みにて、其鋒先きのはげしきは、電光の絶壁にと応ずる如く、激戦勝敗を決せず。去程に、征討総督有栖川宮には、二大隊の兵を随ひ、南の関へと繰出され、それより高瀬へ営を進められ給ふ。八代の官軍は、小蒸気船にて本営往復を遂す。此度の戦争は去日より田原坂越への大戦が実に前後稀なる大挙にして、官軍苦戦の中にも、陸軍少将大山巖君は、僅か十有余人の兵を御して、一際の突戦なりしといふ。田原の險壘を案外早く略取せられしは、将土方の奇功を奏すによりと云々。桐野利秋は、大竹を振り猛戦し、此竹破裂なす頃は、大坂辺へ其身達すと
 ○
 の広言なすと受がたし。

聖上には、三月三十一日、大坂鎮台に入御遊され、本日八代へ出兵、軍列觀覽あり。続いて、戦地にて疵傷人を御慰勞とし、葡萄酒を下され、将士を御愛撫の有難きは、実に感涙服を浸す。其日、直に西京へ還御あり。跡はをいをい、次号に。

明治十年三月五日御届/同四月出版
 編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通二丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「桐野利秋」「東京巡查抜刀隊」「陸軍少将 大山巖君」。



右のそらまゝ 十二号

福岡県下暴動

去る程に、三月二十八日を発端とせし福岡県下筑前の国早良郡ナクマ村に、同国の土族が四、五百人、よりよりに集まり、サア騒動を初め、ごたごたする処より、西南征討のため、下の関へ繰出し、備へを立られ、ある兵隊を至急に出張となり、追討の指揮をもつて撃いだしたるに、暴徒はたまらじと思ひけん。忽ち逃げ散り、アブラヤマ村、又コカサギ辺によりあつまるを以て、再び追討せられ、今度も散乱と逃げ退きしうち、六十四名といふもの捕縛せられ、残れる賊はもつばら探索中の報知あり。爰にまた、一トもんさくは、豊後国中津の賊党凡百人ばかり蜂起なし、大分県へ寄せ来るとをもへば、跡を聞らまし、何国へか奔つたと街説あれども、是は証を得ず。跡はをるを、次号に報す。

明治十年三月五日御届／同四月出版

編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛



鹿兒島縣 有のそのまま 十四号

戦地国界図
 西南の景況は、追々号を嗣ぎたるに、其地図及び熊本国界、里程
 并に官軍諸将方の陣營、焼土の場所、戦争の街、賊軍の屯集処など、
 委しく報せず。よつて今爰に画図を引て予じめ記載なす。

高瀬 総督宮の手に。三浦、伏見の両少将。
 植木には、山県参軍。大山、三好の両少将。
 吉次越には、野津少将。
 八代口には、黒田参軍。川路、山田の両少将。
 熊本には、谷少将。下の関より福岡に向ふて曾我少将。
 西京には、四条少将。
 東京には、西郷中将。井田、東伏見の両少将。
 此方々の備へて有ますから、大丈夫請合なり。

里程
 熊本ヨリ
 佐賀 二十三里六丁／宮崎 五十九里六丁／高瀬 六里二十六
 丁／木ノ葉 五里／川尻 二里ヨ／山鹿 六里十五丁ヨ／阪
 ノ下 八里ヨ／鹿兒島 五十三里／菊地 八里／南ノ関 五里
 二十九丁／植木 二里二十三丁／八代 十里二十六丁／田原
 坂 四里十丁／大津 四里二十四丁／高橋 一里二十六丁／小寫
 二里ヨ／人吉 二十六里二丁
 東京ヨリ 鹿兒島へ五百二十五里／長シウ下関 三百八十四里／
 ヒゼン福岡 四百十里／ヒゼン五島 五百十里／各海路ナリ。
 九州沿海廻り 八百六十里七丁四十間。肥後國中 百八十五島。
 薩摩中 百六島。
 跡はをいをい、次号に。

編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛
 明治十年三月五日御届／同四月出版



鹿兒島縣 有のそのまま 十五号

前号に粗記載せし西南評のうち、女隊堂々と繰出してより、その戦功いかなるやと説をまつに、たしかにそれと知れねども、西郷の室とをぼしき一婦、嵐に逆ふ花にひとしく、戦ひの間に間に長刀ひらめき、電光流車と振り挿し、緋襷、風にひるがへり、ほとばしる血と疑ふばかり。戦地深くも勇気を貫き、頼みの兵もいとほしき馬蹄にかけて、烈氣一閃に馳け周るは、額女が門に進むに比せり。いまだ薫名評かならず。生死の界もさだかならぬは、天晴一夫の一婦と呼はるのみ。跡はをいをい、次号に報す。

明治十年三月五日御届／同四月出版
編輯出版 阪府第三天区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

※額女＝板額御前。鎌倉時代初期の女性。巴御前と共に、女武者として有名。

※比せり＝「非せり」を訂す。



鹿兒 有のそのまま 十八号

尋いて、西南評は、西郷隆盛、花岡山へ隊を移し、砲台を堅く
 せるよしなれども、戦撃昼夜絶間なく、植木の賊兵は、官軍野津
 隊五十名ばかりの、不意に襲ひ来つて、突戦はげしきにをどろ
 き、敗して向山に退き、なれど再び取てかへし、植木駅に壘を
 築きたり。官軍の方にも同駅に壘を設けて相對して、其間だ僅か
 に十五、六間を隔たり。田原坂より植木に進んで、官軍は賊壘
 を数ヶ処抜き、大砲、小銃、弾薬を分捕、賊兵を擒とし、放火戦
 に取賊を斃し、勝利度を重ねぬ。山鹿口に屯集なす賊は、植木駅の
 火煙を遥に望み騒ぎて、夜中雨に紛れて、菊地、隈府鳥の巢辺を
 さして、退逃なすと。実に官軍方、続て勝戦の報。天なるかな。
 跡はをいをい、次号にしらす。

※御届、出版日なし。

編輯出版 阪府第三天区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「西郷隆盛」「前原一格」「桐野利秋」。



鹿兒島縣 有のそのま 十七号

- 戦地工繰出シの官軍 人員六万人。
- 同怪我人 開戦ヨリ三月十六日迄 同二千二百二十人。
- 熊本籠城二月十九日ヨリ今日ニ至リ、人員 谷少将 児玉少佐 富岡県令 外兵卒トモ三千五百人 内五十人重傷。
- 内国各砲兵廠、一日毎ニ小銃彈藥七十万ツツ製造ノよし。
- 戦地工繰出シの官将方 有栖川宮 伏見宮 山県参軍 鳥尾中将 黒田参軍 三浦 大山 三好 野津 川路 山田 曾我 高 寫 各少将方。

○賊方

- 人員一万五千人 内死人四千人。
 - 開戦以來潰せし玄米、四千五百石ト云。
 - 賊方にハ一円ヨリ十円迄ノ日本通用と記したる紙幣を製し、取扱よし。
 - 附属賊将 二十五人。
- 跡はをいをい、次号に。

明治十年三月五日御届／同四月出版

編輯出版 阪府第三天区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

※兵卒「兵率」を訂す。



鹿児嶋 有のそのまま 十八号

西南評の続き。頃日も途絶なく、官賊両軍互ひに鎬を削り入乱れ、彼の桐野利秋は、鞭打ち、轡を鳴らし、真一文字に馬を責め、官軍を採配なす野津少将と蹄を併せ、唯一撃と斬付るを程よく避けて、野津君は本陣さして返らるる道、後詰と見へし少佐村田経芳君に行逢ひ、今利秋と斯々と合引せしを告られたるに、経芳君さきもあへず、おのれ賊将逃がさじ、と跡を慕ふて馬を飛ばしに、高き丘に突立つに、桐野は四、五丁隔つて揚々と馬上に見ゆるを、これ究竟、と英国製の射的銃を狙ひ、火蓋を切ればあやまたず、砲声も、利秋は真逆まに馬より落しは心地よくこそ見へたりと、朝野新聞に出る。跡はをいをい、次号に。

明治十年三月五日御届／同四月出版

編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通二丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「桐野利秋」、「」(注)、「少佐村田君」。

(注) 鹿児島市立美術館、西大寺文化資料館、早稲田大学西垣文庫所蔵の同号においても、同様に空欄となっている。本文中から察するに、「野津少将」あるいは「少将野津君」などと記されていたか。



鹿兒島縣 有のそそのま 十九号

続いて、西南評は、四月八日、熊本籠城の兵を一大隊を奥少佐君引率して、城門を出て安政橋まで押だし来るに、橋は賊が毀ちたれば、皆々徒渡りして進むほどに、南岸の賊あるを見懸け、兵を残して是に当らせ、其隙に乗じて兵を進むる途中、官軍の探偵兵に行合ひ、本営の置処を聞いて、速やかに宇土本営へとぞ来会せられ、城中の堅固を語り、尋て十四日には、八代口の官軍、川尻を攻め取り、山川中佐君、一中隊を具して熊本城に至りたり。明る十五日は、雲霧晴れわたり、官軍大挙して熊本城へ連絡を遂げられしは、心地よくこそ見へにけり。植木、木留の賊は、所々に火を懸け、煙りに紛れ、立田山の方へ散々後を見せ、官軍遙に是を望むに、日向路さして潰走なす。去る程に、昨今西郷隆盛の所在がとんとはからず、或ひは船に浮むで琉球へ逃れた、支那へ落たなどと、世説紛々たるに、いづれも信を置に足らず。只、敗走の中にあるべし。天なるかな。連戦数日も、一日一瞬に邪雲散るにいたるは、嗚呼歎ずべし。跡の確報は、次号を待給へかし。

明治十年三月五日御届／同四月出版

編輯出版 阪府第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「前原一格」「西郷隆盛」「桐野利秋」「村田新八」。

※雲霧Ⅱ「雲務」を訂す。



鹿兒島県 有のそのまま 二十号

西南評は、チヨイと話かわつて、賊は熊本を一、二里距る処に有りて、撓はむ色なく、桂衛門といふ者、鹿兒島へ帰りて、県庁を本営となして、三千人の兵を募りて、人吉通りをさして繰り込むで、戦場怪我人は、鹿兒島へをくり、全快次第すくに出張をなすべしと有つて、戦場よりの早うちは日に二度ほど、六人懸りにて、エツシーエツシー、と駕を県庁へ飛ばしこむ。扱ここに一際目立ちたるは、千紫万紅、陣羽をりやら、寅の皮のふんどし、ドツコイ、尻鞆の太刀、隊長には縮緬の旗さし物。かすかに聞こゆる遠攻は、熊本より賊へ加勢の神風隊の貝鉦太鼓、多勢を率ひて寄せたり、寄せたり。ハテ頑固なるありさまなり。○官軍には木山の賊壘を抜き、宇土口の兵と連絡有て、其後双方戦ひを鎮め、賊は此辺を引はらひ、征討部署を謀らん見こみ。官陣より斥候を出して、賊の事情を探偵なすといふ。つづいて、いかなる報知なるや。それはをいをい、次号に出す。

明治十年三月五日御届／同五月出版
 編輯出版 大阪第三大区六小区新町南通一丁目十一番地 金井徳兵衛

- ※早うち＝馬などを馳せて急用の使いをすること。また、その使者。
- ※千紫万紅＝様々な色。色とりどりの花が咲き乱れること。
- ※尻鞆＝雨露を防ぐために、太刀の鞘を覆う毛皮製の袋。
- ※貝鉦＝法螺貝と鉦・鐘などの金属打楽器の類。



夏陣 有のそのまゝ 二十一号

方今、戦地日向をいいては、山頂峨々として、進馬凸凹を踏み、一丁だに平地を見ず。実にその難路、筆に尽すあたはず。ゆへに、田地乏しく、海に遠く、米を黍にかへ、年中の食となすとき。既に賊兵、現今同国界都の城に寄るを、官軍より追撃なすに、蒲生、吉田を攻立、引続き都の城へ向ふ術なりと。一方、延岡口を追滅なすに、カチジ峠の集賊を撃つこと、官兵二手に分ち、赤松口メガラ峠、サルゲヤ峠へ斥候を出せしに、はたして敵の胴壁に近づき、戦ひを開くといへども、日すでに西に落ち、高峠に戻る頃にいたり、兵をまとめてサルゲヤの正面へ退き、其後屡の狙撃は、をいをい次号に報ず。

貞信画

編輯出版 阪府第三天区六小区新町裏通二丁目十一番地 金井徳兵衛
明治十年三月五日御届

「桐野利秋」。



夏陣 有のそのまま 二十二号

現今、戦地を見請けますれば、ワット報知を聞た新説は、熊本
 別働隊三旅団の一大隊、出水口より指揮を烈しうして、鹿兒島さ
 して進入し。そこで川路少将君も進め進めと続いて、只今恙なく
 連絡大丈夫の本懐を遂られし、と鹿兒島より着港の者が、其は細々
 上申しました。去る程に、日州都の城へ傾ぶく賊を追滅せんと、
 蒲生、吉田より官軍目的を定め、其境界を次第に進撃を逞しうし、
 賊兵が所々へ頭はれうつる患を以て、官兵四線を堅く守り、後
 に賊なく向ふばかりに、破竹の勢ひにはをたまりはありません。
 だんだんよい旗色の確知がありますが、もちつとで安穩の枕を並
 べませう。時に西郷が在所は何国で有う。あちらを焼たり、こち
 らを攻ても、頓と知れず。天へでも舞あがつたであろうか、そふ
 でもない。海軍省附属造船所にて、今度風船を製造が出来、不日
 戦地へ御廻しにて、賊敵の軍營を蟻の這ふまで臨むといふ街説が
 あり升。いかな西郷も、うろついて居られますまい。跡はおのおの、
 次号といたします。

明治十年 月 日御届
 編輯出版 阪府第三天区六小区新町裏通一丁目十一番地 金井徳兵衛

画面右に「風船よりの目鏡中に西／南賊首を見とめる景況」とある。



夏陣 有のそのま 二十三号

日向の城

去る程に、薩兵は日向路都の城を要害大盤石と占め込み、戦気が折いて枕に就き、巫山の夢をむすばんとすも、邪を悟り、官旗の赫明たる陰に隠るより、或は酒戦に盆盤を撃ち、歌舞音曲に耽りて、砲声を避け、残賊、山に満ち野に溢るるも、其滅すること、弘焼の星に等しく、鋒を折り、汗馬を責る。斥候は、降伏あれど、柵を叩いて停ずとの街説は、最早鎮定の近況にありて、官将方の精功実に見然たり。跡はをいをい、次号に。

明治十年 月 日御届/同出版
編輯出版 阪府第三大区六小区新町裏通一丁目十一番地 金井徳兵衛

右から、「西郷隆盛」「池上四郎」「桐野利秋」「前原一格」「永山九成」「西郷妻」「弟子丸応助」。

※巫山の夢は男女が夢の中で結ばれること。

【附記】

本稿をなすにあたり、久留米大学准教授大庭卓也氏から多くのご助言をいただきました。また、西大寺文化資料館における所蔵調査は、聖望学園高等学校非常勤講師高橋未来氏に協力を依頼して行い、同館スタッフの山本鐘生氏からは、資料の来歴を詳しくご説明いただきました。記して御礼申し上げます。なお、本稿はJDS科研費15K16694の助成を受けたものです。

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 86 September 2016

Seinan War Nishiki-e Collection:

“Ari-no-sono-mama” by Kanai Tokubee (Published in Osaka, March, 1877)

Masahiro IKIZUMI 1

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2016